

---

# 召喚獣を召喚できない召喚師

sukesuke

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

召喚獣を召喚できない召喚師

### 【Nコード】

N5254Y

### 【作者名】

sukesuke

### 【あらすじ】

少年は、ただ空だけを見ていた。処刑台までの道のりで少年は思い出す。

自らの罪を顧みながら思い出す。

自らの罪の軌跡を。

## 処刑台までの道のりで（前書き）

初めての投稿なのでよろしく願いします。

なお題名は、召喚獣ですが召喚獣はしばらく出てきません。  
あしからず。

## 処刑台までの道のりで

空が青かった。自分の見る最後の空だというのに吸い込まれるような青色だった。

あれほどの事があったのに、それらを忘れてしまいそうになるほどいつも道理に澄み渡っている。

自分とかかわった人々すべてを不幸にして自分の歩いてきた道には、数えきれないほどの死体の山を築いてきた。

唯一無二の親友を裏切り、こんな自分に好意を抱いてくれていた人にはその好意を利用して切り捨てた。

大を生かすために小を殺し続けた自分には今の末路がお似合いだとも感じてる。

自分の犯した罪を自分の死によって清算できるかどうかは、わからない。

キリストは、処刑台まで自らを磔にする十字架を運ばされたというが、今の自分には土台無理な話だった。

なくしてから初めて気付くもの、今の自分には、四肢がなかった。

腕は、肘から上が脚は、太ももから下がきれいに切り取られていた。だから今は自分を殺すであろう黒い覆面を被った大男の肩に担がれて、小高い丘の上に立つ十字架のところまでなすすべなく運ばれようとしていた。

四肢があつたところで抵抗する気もなかったが、今はただ青い空だけを眺めていたかった。

この世界に生を受けた時とかわらぬこの空を。

そうやって俺はこの世界に転生した時のことを思い出す。

自らの罪の軌跡を

処刑台までの道のりで（後書き）

誤字脱字、などあれば教えてください。

## プロローグ すべての始まり

それは、生まれた時から一つだった。それは、その聡明な頭で、生まれたときから理解していた。

自分は一つだと、一つしかない種族で一つしかない種族だと

途方もない時間の間孤独だった。

それは、孤独のあまり一つの新たな種族を作った。

その種族は、瞬く間に地に広がり増えた。

その間に種族たちが、愚かしくも互いを傷つけて滅び去るのも何度も見た。

世界の安寧を願うそれは、世界に原初の闇をかけた。

それから再び長い時が流れた。

そしてそれは、悠久とも取れる長いを時間かけてその種族の世界の闇がはれ光が満ちはじめているを感じた。

そしてそれは、動き出す。

世界を再びを暗い闇で包み込むために。

## 「誕生」

結果から簡潔にいうと、この俺小澤悠太は、享年17歳で死んだ。

日々の行いは、悪くなかったほうだと自負しているが、この世界のどっかにいる神様には、嫌われていたらしい。

とにも、かくにも、17歳の時、俺は正面から突っ込んできた大型のダンプに轢かれてミンチになった。

どのぐらいたったんだろうか、どこか温かい水に包まれてひたすら寝て起きてを繰り返り繰り返していたような気がする。

浅い夢、深い夢。

それらを交互に繰り返して俺は、自らの身体が覚醒に近づいていくのを感じた。

知覚したといっても思考したのではなく本能的に感じたのである。

そうしてしばらくたった頃、突然頭に甘く鈍い痛みを感じた。

痛みは、額を伝ってうなじに流れ背中を通り踵まで達した。

その痛みの伝導が終わった瞬間。

今度は身体が一気に覚醒に傾く、先ほどの甘く鈍い痛みではなく悲鳴を上げたくなるような激痛。体を覆っていた水が流れ出し、それと同時に体が押し出される。頭、首、肩、胴体、腰、脚から足そして踵、つま先。

身体がすべて外に出て俺が初めに感じたことは、衝撃、光、匂い、感触、すべてを同時に感じた。

最後の衝撃によって自分の中で何かが外れ俺は、泣き出してしまった。

もちろん17歳男子の臭い泣き声ではなくて、

「オギャー……」

という赤ん坊の泣き声である。

自分が生まれてどのぐらいたったかどうか、ふと目を覚ますと大人たちが怖い顔して駆け回っている。

何かあったのかな、などと考えているときれいな金髪碧眼女性が生まれただけ俺の身体に毛布をまいて俺を抱いてどこかに運ぶ。

生まれたばかりの俺をどこに連れて行くのだろうか？

そこまで考えると考えるのがめんどくさくなってまた寝た。

ひたり、ひたり、俺の顔に温かいしずくが落ちる。それによって目を覚ました俺は、先ほどの女性が泣いているのが見えた。

今思えばこの人が俺の母親だったのかも知れない。

なぜ「かも知れない」になるのか。

結果から言うと俺は捨てられた。毛布に包まれたまま俺は、魔物の巣食う森に置き去りにされたのだった。

## 「出会い」その1

小澤悠太前世では、ダンプにひかれて享年17歳で死亡。

なぜか生まれ変わっても前世の記憶持ったままただ今、絶賛赤ん坊ライフを満喫中。

吾輩は赤ん坊であるまだ名前はない。なんちゃってな！

生まれ変わったのはいいけれどなんでか生まれてすぐ捨てられてしまった。毛布に包まれたまま魔物の森に置き去りにされた。人でなし！

そんな感じで人生初めての命の危機を生後三時間で体験しちまったぜ。いやっほう！全然嬉しくねえ

そんな時、俺を助けてくれたのが今の俺の育ての親。でっかいドラゴンなんだ。

いやドラゴンだぜドラゴン、なんでか知らねえけど魔物に襲われそうになったとき空からバツて現われてシュツてやさしく俺のことをつかんでそしてズサーーッて感じで俺のことを空に連れ去った。

まさに三拍子バツ、シュツ、ズサーーッて感じ、ちょっと待てズサアアアアアて感じかも。

まあつまりこの時俺は、3つのことを考えてた。

一つ目は、魔物を見たときは、あんまり感じなかったけれどドラゴ

ン見たときえらくファンタジーっぽい世界に来てんなとスゲー感じた。魔法とかもあんのかなワクワク。

二つ目は、命の危険を感じたのも生後三時間だが初めてのS K I H I G Hも生まれて三時間だったぜ。いやっほう！うん、こっちはやつほう！

あっスペル間違えた。

そして栄光の三つ目は、パンパカパーン。現在進行中で生命の危険ありってことだあああああ！

そしてドラゴンは、羽を広げ制動かけて着陸態勢に入る。そしてドッカーンて感じで着陸。

ちなみに俺は着陸のとき思いっきり泣き叫んでしまった。もちろんうわー、ではなくオギャー、である。

そんな感じで着陸したドラゴンはそつと俺のことを地面に降ろし優しく俺に囁いた。

囁くというよりも響くのほうが正しいかもしれない。その声は、優しく俺の中に響いた。

（今のあなたには、理解できないかもしれない。ただ引き寄せられたというよりも気が付いたらあなたのことを助けていた。私たち誇り高い竜の血族は、運命と血のつながりを最も信奉している。あなたから運命のつながりを感じた。だからあなたは、私の子。我が子よ今は眠りなさい。あなたのことは、この誇り高き竜の血統の一人、

イリス「ハイドベルトがあなたのことを守ります」

この言葉の後俺は、意識を失った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5254y/>

---

召喚獣を召喚できない召喚師

2011年11月20日16時56分発行